

知多半島ケーブルネットワークコミュニティ誌 [ココナッツクラブ]

COCONUTS CLUB

October
2021 / 10

トンネルものがたり



知多半島でトンネルと言われても
ぴんとこない人が多いかもしれない。
しかし半島全域を見まわすと、
地域性あふれる興味深いトンネルが存在する。
知られざるトンネルと名所を訪ねて、
旅行気分で近場を巡ってみよう。

トンネル ものがたり

謎トンネルの向こうに何が？

知多半島の道路と鉄道にトンネルがいくつあるかご存じだろうか。答えは十。名鉄知多新線に七つ、名鉄河和線高横須賀―南加木屋間に一つ、南知多道路古布IC―豊丘IC間の切山トンネル、そして衣浦海底トンネルである。このうち八つが美浜町と南知多町にあり、知多半島の先端はけっこう山がちな土地であることがわかる。

実はこのほかにもうひとつ、通り抜けることができないトンネルが南知多町に存在する。その名は「内海トンネル」。名前だけ見ると幹線道路にあるように思えるが、ほとんど知る人もいない廃道のトンネルだ。

そこへ行くには、国道247号の小野浦交差点から中日小野浦キャンプバンガロー村の間を抜けて、山の中へ続く細い道に入り込む必要がある。この道は「今場坂」と呼ばれる峠越えの道。車のすれ違いも困難なほど狭いが、海岸沿いのルートが開かれるまでは小野浦と内海を結ぶ幹線道路だった。

キャンプ場から二百メートルほど進むと、旅館「望水荘」への道が分岐する。ここで立ち止まって右手の藪に目を向けてみよう。そこに突如として現れるのが内海トンネルだ。入り口は網で塞がれ、中は土砂で埋まり出口が見えない。地図を確認すると、向こう側は通称「お吉が浜」の上、標高約三十メートルの崖上である。いったいなせこんなところにトンネルがあるのだろうか？

入り口に、そのヒントを記した手書きの案内板がある。内海の地域活動グループ「きずなの会」が五年前ほど前に設置したものだ。これを見て同会の大岩隆さんに問い合わせると、以下のことを教えてくれた。

トンネルが開かれたのは昭和三年（一九二八）。内海の旅館経営者の林喜助が、私財を投じて作ったという。昔は、トンネルを抜けると海岸に建つ「千鳥館」という宿への下り道があった。当時、小野浦から内海にかけての海岸は「白浜（三津浜）」とも呼ばれ、ほぼ手つかずの美しい砂浜だった。ここに目を付けた林喜助が、観光地として開発しよ

うと旅館を開き、今場坂の県道からのアクセスのためにトンネルを掘ったというのである。写真が残っていないのでどんな宿だったのかはわからないのだが、少なくともロケーションは、プライベート感あふれる現代のリゾートホテルのような感じだったのではないだろうか。

残念ながら千鳥館は火災のためわずかの期間で閉鎖され、また、昭和六年（一九三一）には海岸沿いに新道が完成したため、内海トンネルが使われたのは昭和初期のほんの数年にすぎなかった。とはいえ、こんな立派なトンネルまで作ってしまった先人の、観光に対する情熱には感じ入らざるを得ない。知多半島の観光史の中で異彩を放つ「史跡」である。

「天然記念物と隧道」二題

観光地とトンネルの組み合わせといえば、南知多町には「ウバメガシのトンネル」がある。これは山に穴を穿った道路トンネルではなく、アーチ状に生育した植物がまるで

トンネルのように道を覆っていることからこう呼ばれる。

そのトンネルがあるのは、師崎の船着場の西側のこんもりした山中。ここは羽豆神社の境内地で、ウバメガシのトンネルを含む一帯が「羽豆神社の社叢」として昭和九年（一九三四）に国の天然記念物に指定されている。指定理由は、暖地海岸性の多様植物が密生し、周辺にはない独特の景観が展開しているから。指定に先立ってまとめられた県の調査報告書には二十七種類の樹木が挙げられており、中でも偉観を誇るのがウバメガシだと記されている。曰く「無数のうばめがし左右に長く駢列して宛然隧道の状を成すが如くその雅致名状すべからず（訳・無数のウバメガシが左右に長く並ぶ様はまるでトンネルのようで、その風雅さは言葉にできないほどだ）」。

実際に歩いてみると、老漁師の腕のように貫禄のある幹が蜻の足の如くうねうねと自由に伸びて散策路を覆い、艶々した濃緑の葉が眩しい光を遮っている。なるほど、これ

半島の短いトンネルを抜けると海辺のリゾートであった。



内海トンネル(4.0有せ)
1928年昭和3年中海旅館の林喜助が
私財を投じて建設した史跡



この木々は海上から吹いて来る 潮風で面白いかたちをしています。

(昭和24年発行の小学生向け副読本「師崎」より)



は確かにトンネルだ。周囲から隔絶されたような雰囲気もあり、どこにも無人島をさまよっている気分にも浸れる。他の遊歩道や公園では見たことがないこの独特な景観は、両方向から風を浴びる半島の一番先っぽという地形がもたらしたものだろう。

さて、知多半島ではもうひとつ、美浜町の「鶉の山ウ繁殖地」が羽豆神社の社叢と同時に国の天然記念物に指定されている。鶉の山は、美浜町総合運動公園の少し北に広がる丘陵地のこと。ウの種類はカワウで、山に広がるアカマツやコナラの上に営巣し、麓にある鶉ノ池(堂前池)では、木にとまり羽を休めるカワウの群れを見ることが出来る。観光地としてはちよつと穴場めいたスポットだが、ウバメガシのトンネルと同様に他ではあまりお目にかかれない光景だ。

天然記念物に指定されたのは、ここが国内有数のカワウ繁殖地だったからだ。カワウがこの場所に定着したのは江戸時代後期の天保年間といわれ、最盛期には一万余

近くもいたとか。自然科学的な価値を認められる以前に、地元では資源的な価値が高かった。ウの糞が肥料となることから、明治から昭和初期にかけて盛んに採集され、上野間村の地場産業のひとつになっていたほどだという。

しかし、その大量の糞が堆積してアカマツが枯れてしまったので、昭和四十年頃には営巣地も東の方へ移動してしまっただけでなく、鶉の山からカワウが完全にいなくなってしまうこともなく、現在に至っている。

その繁殖地をかすめる南知多道路に、カワウのために設けられたトンネルがある。美浜パーキングエリアと美浜インターの間、下り線に二つ、上り線に三つある道路を覆う構造物がそれだ(扉写真)。山間部や寒冷地の道路では、落石や降雪対策で道路を覆う施設が設けられることがあるが、なぜ険しくも寒くもない美浜町にあるのか不思議に思うドライバーも多いのではないだろうか。

この施設は「鶉の山遮光トンネル」と呼ばれている。カワウは、日没になると音や光に対して敏感になると考えられており、自動車の通行でカワウの生育が妨げられることのないようにと、昭和四十五年(一九七〇)の開通時に設置された。愛知県道路公社によると、当時は自然環境に配慮した工事が一般的ではなく、画期的な施設だったという。

海底〇・二九哩

最後に紹介するのは「衣浦海底トンネル」である。正式には単純に「衣浦トンネル」といい、半田市と碧南市を結ぶ一七キロの有料道路だ。そのうち、碧南方向の一・二四メートル、半田方向の一・〇一九メートルがトンネル区間になっている。

トンネルが通じているのは衣浦港のほぼ中央部で、半田側は「11号地地区」、碧南側は「4号地地区」と呼ばれる埋め立て地である。海辺の半田緑地公園に建つ展望台から眺めると、対岸はまさに目と鼻の先で、距離はわずか四百メートルほど。このくらいの幅なら橋を架け

でもよさそうなものだが、なぜトンネルにしたのだろうか。

衣浦港は昭和三十二年(一九五七)、国の重要港湾に指定され、昭和三十年代から四十年代にかけて大造設が行われた(詳しくは本誌二〇一八年二月号の特集「60年目の衣浦港」参照)。以後、多くの大工場や貨物拠点が立地し、東海地方の産業発展の一翼を担ってきた。海底トンネルが開通したのは昭和四十八年(一九七三)。それまでは、半田市亀崎と高浜市の間に架かる昭和三十一年(一九五六)開通の衣浦大橋が両岸を結ぶ唯一の道路だったが、交通量は増加の一途をたどり、昭和四〇年代初頭にはすでに飽和状態にあった。そこで、半田と碧南の間に新たなルートを設けることになった。

しかし条件が一つあった。それは、港内を航行する大型貨物船の航行に支障をきたさないこと。もし橋を架けた場合、船のサイズを考慮すると最低でも海面から五十二メートルの高さが必要となる。そんな巨大な橋を建設するよりは、

衣浦港の底に愛知の産業を支えてきた偉大なトンネルがある。

海底をトンネルで通した方がコストを抑えることができる。そんな試算により、海底トンネルが建設されることになったのである。しかもここでは、地中を掘るよりさらに安く、かつ工事も安全な工法が採用された。それは「沈埋トンネル」と呼ばれ、巨大な管状の構造物を海底に沈めるといふもの。日本では二例目となる画期的なトンネルだった。

建造物としては珍しいのだが、いかにせん距離が短く、車だとなつという間に走り抜けてしまうのがちょっと惜しい。このトンネルをもっと楽しみたいのであれば、歩くのが一番いい。実はこのトンネルには、開通当時から歩道トンネルが併設されている。

半田緑地公園の海側の外れにある、何かの格納庫にも見える素っ気ない建物はその入口になる。これは半田方向のトンネルの立坑で、送風・排気排水などのために設けられたもの。エレベーターはなく、スロープ付きの階段を何度も折れながら真下へ約十五メートル下りる

と底に到達。そこから人が二人並んで歩ける幅の歩道が伸びている。なんの飾り気もなく、蛍光灯だけが点々と先に続いている様は、どこか秘密基地の地下通路のようであり、ワクワクさせてくれる雰囲気だ。

ところどころに設置されたスピーカーからはFMラジオが流れており、流行りの音楽やラジオパーソナリティの軽快な声が響き渡っているのが少しシユール。しかし、そのおかげで怖さを感じることもない。人道海底トンネルの距離は四八〇m、碧南側の地上に出ても三十分程度で往復できる。ウォーキングやランニングで日常的に利用している地元の人もけっこう多いようだ。読者の皆さんも半田に出かけたついでに、ちょっと珍しい海底散歩を楽しんでみてはいかがだろうか。

〈取材協力〉

大岩隆さん／南知多町社会教育課／愛知県道路公社

愛知道路コンセンション株式会社

〈参考文献〉

国土研究誌のみみ 第102号所収「美浜町小野浦境の内海字

揚西内海トンネルの謂れは「大岩隆」

愛知縣史蹟名勝天然記念物調査報告第十二

南知多町誌（昭和40年版）／南知多町誌 本文編

美浜町誌 本文編／角川地名大辞典23愛知県

衣浦海底トンネル（運輸省第五港湾建設局衣浦工務事務所）

衣浦港五十歩の歩み 衣浦港重要港湾指定50周年記念事業実行委員会